

2013年 3月14日・週刊きたかみでは

詩集『忘れない』岡田忠昭氏 発刊

「全ての日本人は原発の地元住民なのだ」と言い、3.11以前から『原発詩篇』を書き続ける詩人…と福島在住の詩人・若松丈太郎氏が書く。『岡田忠昭詩集「忘れないー原発詩篇増補三版」(コールサック社)』の賛。岡田氏は1947年愛知県生まれ。名古屋市在住。私家版小詩集や同社の詩集でも発表。

二章構成で、極限の思いから発した作品がほとんどの一章に7作品収録。峠三吉「原爆詩集」「序」を参考にした「人生をかえせ」から始まっている。

2012年、詩の学校が二本松で実施し、参加。郡山駅に降り立って生まれた作品も生々しい。9篇収めた二章は被災者の未来を悲しみの表現とともに「いつの日か」「街跡の森」や「迎春」で希望を照射する。

漏れ続ける放射線、最終処理すら決まっていない核廃棄物。「今ここに居合わせた者としての責任がある」とあとがきに記した。「序詞 忘れない」にはこうある。

青いままで／汚された／青空 さくら草は／放射能にまみれ 餓死した牛の／波打つあばら 静寂が／凍りつ
いた／商店街 食卓から／笑い声が／消えた

1冊の売上金のうち、311円を福島の被害者への支援金にする。

と紹介されています。

